文福茶がま

楠山正雄

一

むかし、上野国館林に、茂林寺というお寺がありました。このお寺の和尚さんはたいそうお茶の湯がすきで、いろいろとかわったお茶道具を集めてまいにち、それをいじっては楽しみにしていました。

ある日和尚さんは用事があって町へ行った帰りに、一軒の道具屋で、気に入った形の茶がまを見つけました。和尚さんはさっそくそれを買って帰って、自分のお部屋に飾って、

「どうです、なかなかいい茶がまでしょう。」

と、来る人ごとに見せて、じまんしていました。

ある晩和尚さんはいつものとおりお居間に茶がまを飾ったまま、そのそばでうとうと居眠りをしていました。そのうちほんとうにぐっすり、寝込んでしまいました。

和尚さんのお部屋があんまり静かなので、小僧さんたちは、どうしたのかと思って、そっと障子の透き間から中をのぞいてみました。すると和尚さんのそばに布団をしいて座っていた茶がまが、ひとりでにむくむくと動き出しました。「おや。」と思ううちに、茶がまからひょっこり頭が出て、太いしっぽがはえて、四本

の足が出て、やがてそのそとお部屋の中を歩き出しました。

小僧さんたちはびっくりして、お部屋の中へとび込んで来て、

「やあ、たいへんだ。茶がまが化けた。」

「和尚さん、和尚さん。茶がまが歩き出しましたよ。」

と、てんでんにとんきょうな声を立ててさわぎ出しました。その音に和尚さんは目をさまして、

「やかましい、何をさわぐのだ。」

と目をこすりながらしかりました。

「でも和尚さん、ごらんなさい。ほら、あのとおり茶

がまが歩きますよ。」

こうてんでんに言うので、和尚さんも小僧さんたちの指さす方を見ますと、茶がまにはもう頭も足もしっぽもありません。ちゃんともとの茶がまになって、いつの間にか布団の上にのって、すましていました。和尚さんはおこって、

「何だ。ばかなことを言うにもほどがある。」

「でもへんだなあ。たしかに歩いていたのに。」

こう言いながら小僧さんたちはふしぎそうに、寄って来て茶がまをたたいてみました。茶がまは「かん。」と鳴りました。

「それみろ。やっぱりただの茶がまだ。くだらないことを言って、せっかくいい心持ちに寝ているところを起こしてしまった。」

和尚さんにひどくしかられて、小僧さんたちはしょげて、ぶつぶつ口こごとを言いながら引っ込んでいきました。

そのあくる日和尚さんは、

「せっかく茶がまを買って来て、ながめてばかりいてもつまらない。今日はひとつ使いだめしをしてやろう。」

と言って、茶がまに水をくみ入れました。すると小

さな茶がまのくせに、いきなり手おけに一ぱいの水をがぶりと飲んでしまいました。

和尚さんは少し「へんだ。」と思いましたが、ほかに変わったこともないので、安心してまた水を入れて、いろりにかけました。すると、しばらくしてお尻があたたまってくると、茶がまはだしぬけに、「あつい。」と言って、いろりの外へとび出しました。おやと思う間にたぬきの頭が出て、四本の足が出て、太いしっぽがはえて、のこのことおざしきの中を歩き出しましたから、和尚さんは、「わあッ。」と言って、思わずとび上がりました。

「たいへん、たいへん。茶(ちゃ)がまが化(ば)けた。だれか来(き)てくれ。」

和尚(おしょう)さんがびっくりして大きな声(こえ)で呼(よ)び立(た)てますと、小僧(こぞう)さんたちは、

「そら来(き)た。」

というので、向(む)こう鉢巻(はちまき)で、ほうきやはたきを持(も)ってとび込(こ)んで来(き)ました。でももうその時分(じぶん)にはもとの茶(ちゃ)がまになって、布団(ふとん)の上にすましていました。たたけばまた「かん。かん。」と鳴(な)りました。

和尚(おしょう)さんはまだびっくりしたような顔(かお)をしながら、

「どうもいい茶(ちゃ)がまを手(て)に入(い)れたと思(おも)ったら、とんだ

ものをしょい込んだ。どうしたものだろう。」
と考えていますと、門の外で、
「くずい、くずい。」
という声がしました。
「ああ、いいところへくず屋が来た。こんな茶がまはいっそくず屋に売ってしまおう。」
和尚さんはこう言って、さっそくくず屋を呼ばせました。
くず屋は和尚さんの出した茶がまを手に取って、なでてみたり、たたいてみたり、底をかえしてみたりしたあとで、

「これはけっこうな品物です。」
と言って、茶がまを買って、くずかごの中に入れて持って行きました。

二

茶がまを買ったくず屋は、うちへ帰ってもまだにこにこして、
「これはこのごろにない掘り出しものだ。どうかして道具ずきなお金持ちをつかまえて、いい価に売らなければならない。」

こう独り言を言いながら、その晩はだいじそうに茶がまをまくら元に飾って、ぐっすり寝ました。すると真夜中すぎになって、どこかで、

「もしもしくず屋さん、くず屋さん。」

と呼ぶ声がしました。はっとして目をさましますと、まくら元にさっきの茶がまがいつの間にか毛むくじゃらな頭と太いしっぽを出して、ちょこなんと座っていました。くず屋はびっくりして、はね起きました。

「やあ、たいへん。茶がまが化けたぞ。」

「くず屋さん、そんなにおどろかないでもいいよ。」

「だっておどろかずにいられるものかい。茶がまに毛

がはえて歩き出せば、だれだっておどろくだろうじゃないか。いったいお前は何だい。」

「わたしは文福茶がまといって、ほんとうはたぬきの化けた茶がまですよ。じつはある日野原へ出て遊んでいるところを五、六人の男に追いまわされて、しかたなしに茶がまに化けて草の中にころがっていると、またその男たちが見つけて、こんどは茶がまだ、茶がまだ、いいものが手に入った。これをどこかへ売りとばして、みんなでうまいものを買って食べようと言いました。それでわたしは古道具屋に売られて、店先にさらされて、さんざん窮屈な目にあいました。その上

何も食べさせてくれないので、おなかがすいて死にそうになったところを、お寺の和尚さんに買われて行きました。お寺では、やっと手おけに一ぱいの水をもらって、一口にがぶ飲みしてほっと息をついたところを、いきなりいろりにのせられて、お尻から火あぶりにされたのにはさすがにおどろきました。もうもうあんな所はこりこりです。あなたは人のいい、しんせつな方らしいから、どうぞしばらくわたしをうちに置いて養って下さいませんか。きっとお礼はしますから。」

「うん、うん、置いてやるぐらいわけのないことだ。

だがお礼をするってどんなことをするつもりだい。」

「へえ。見世物でいろいろおもしろい芸当をして見せて、あなたにたんとお金もうけをさせて上げますよ。」

「ふん、芸当っていったいどんなことをするのだい。」

「さあ、さし当たり綱渡りの軽わざに、文福茶がまの浮かれ踊りをやりましょう。もうくず屋なんかやめてしまって、見世物師におなんなさい。あしたからたんとお金がもうかりますよ。」

　こう言われてくず屋はすっかり乗り気になってしまいました。そして茶がまのすすめるとおりくず屋をやめてしまいました。

そのあくる日夜(よ)が明(あ)けると、くず屋(や)はさっそく見世物(みせもの)のしたくにかかりました。まず町(まち)の盛(さか)り場(ば)に一軒(けん)見世物小屋(みせものごや)をこしらえて、文福茶(ぶんぶくちゃ)がまの綱渡(つなわた)りと浮(う)かれ踊(おど)りの絵(え)をかいた大看板(おおかんばん)を上(あ)げ、太夫元(たゆうもと)と木戸番(きどばん)と口上(こうじょう)言(い)いを自分(じぶん)一人(ひとり)で兼(か)ねました。そして木戸口(きどぐち)に座(すわ)って大きな声(こえ)で、

「さあ、さあ、大評判(おおひょうばん)の文福茶(ぶんぶくちゃ)がまに毛(け)が生(は)えて、手足(てあし)が生(は)えて、綱渡(つなわた)りの軽(かる)わざから、浮(う)かれ踊(おど)りのふしぎな芸当(げいとう)、評判(ひょうばん)じゃ、評判(ひょうばん)じゃ。」

と呼(よ)び立(た)てました。

往来(おうらい)の人たちは、ふしぎな看板(かんばん)とおもしろそうな

口上に釣られて、ぞろぞろ見世物小屋へ詰めかけて来て、たちまち、まんいんになってしまいました。

やがて拍子木が鳴って、幕が上がりますと、文福茶がまが、のこのこ楽屋から出て来て、お目見えのごあいさつをしました。見るとそれは思いもつかない、大きな茶がまに手足の生えた化け物でしたから、見物はみんな「あっ。」と言って目をまるくしました。

それだけでもふしぎなのに、その茶がまの化け物が両方の手に唐傘をさして扇を開いて、綱の上に両足をかけました。そして重い体を器用に調子をとりながら、綱渡りの一曲を首尾よくやってのけまし

たから、見物はいよいよ感心して、小屋もわれるほどのかっさいをあびせかけました。

それからは何をしても、文福茶がまが変わった芸当をやって見せるたんびに、見物は大喜びで、

「こんなおもしろい見世物は生まれてはじめて見た。」

とてんでんに言いあって、またぞろぞろ帰っていきました。それからは文福茶がまの評判は、方々にひろがって、近所の人はいうまでもなく、遠国からもわざわざわらじがけで見に来る人で毎日毎晩たいへんな大入りでしたから、わずかの間にくず屋は大金持ちになりました。

そのうちにくず屋は、「こうやって文福茶がまのおかげでいつまでもお金もうけをしていても際限のないことだから、ここらで休ませてやりましょう。」と考えました。そこである日文福茶がまを呼んで、

「お前をこれまで随分働かせるだけ働かして、おかげでわたしも大したお金持ちになった。人間の欲には限りがないといいながら、そうそう欲ばるのは悪いことだから、今日限りお前を見世物に出すことはやめて、もとのとおり茂林寺に納めることにしよう。その代わりこんどは和尚さんに頼んで、ただの茶がまのようにいろりにかけて、火あぶりになんぞしないようにして、

大切にお寺の宝物にして、錦の布団にのせて、しごく安楽な御隠居の身分にして上げるがどうだね。」

こう言いますと、文福茶がまは、

「そうですね。わたしもくたびれましたから、ここらで少し休ませてもらいましょうか。」

と言いました。

そこでくず屋は文福茶がまに、見世物でもうけたお金を半分そえて、茂林寺の和尚さんの所へ持って行きました。

和尚さんは、

「ほい、ほい、それは奇特な。」

と言いながら、茶がまとお金を受け取りました。

文福茶がまもそれなりくたびれて寝込んでもしまったのか、それからは別段手足が生えて踊り出すというようなこともなく、このお寺の宝物になって、今日まで伝わっているそうです。

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年5月10日第1刷発行
1992（平成4）年4月20日第14刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年8月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。